

---

# 火の鳥 少年編

加来間沖

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

火の鳥 少年編

### 【Nコード】

N0230Y

### 【作者名】

加来間沖

### 【あらすじ】

時は20xx年。

1人の少年がある朝外に出た。すると光が空を覆った。  
少年がそこで見たものとは？

人は何のために生きているのか？

火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？（前書き）

今の人間の内、何パーセントの人間が生きる意味を分かっているだろうか？

## 火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？

20xx年…。

この物語は終わりから始まる。この世の終わりが来たのは実に2日前。

土曜日という日は部活をしていない中学生の自分にとっては、とてもうれしい日だ。今日怠けてもまた明日ダラダラできるのだ。

何の考えもなしに家から出たこの少年は山下竹一（14）で、そこから辺にある中学に通学している、普通の中学生だ。

この日はとにかく暑い。自分がナメクジなら干からびているだろうし、その前に塩分をさがし求め自害しているかもしれない。どちらにしろ屍化しているのは火を見るより明らかである。そんなことを考えていると突如、盲色になるんじゃないだろうかと思うほどの光が空を覆った。周りのものが分子レベルで破壊される様な錯覚に陥っている。目が回る。体が溶けていく…。

ドツ…鈍い音がした。頭を金属バットでぶん殴ったらこんな音がするのだろう。とにかく痛々しい音が聞こえた。自分という固体が人間の形を成していると分かったのは、体のいたるところがヒリヒリ痛んでいるからだ。

「大型トラックと衝突したのかな…」独り言をいい目を恐る恐る開いた。…何も見えない。

目を閉じてまぶたを指で擦ってみる。何か刺さっているという感覚はなく、普通に本来の働きをしていると判断した自分は、暗いところにいる意味を説明しようと思ったが何もできないし分からない。

目の前に炎のような輝きを感じた。いや気のせいではない。それ

を鳥の姿をしていた。

「一体どうなってんだか」と呟くと「分からなくて当然よ」鳥が喋った。

まさかこれが火の鳥。話を聞いたことがある太古の昔からいて絶対に死なず、その血を飲めば永遠の命をが得られる。これがその鳥か。

「僕はどうなってんですか」「あなたは死んだのよ。でも大丈夫あなたは生き返るわ」そう言うとその鳥は暗闇の向こうへ飛んでいった。

「待つて」ハッとなって僕は布団から起きた。「夢？」  
しかしどうも変だ。ここは自分の部屋じゃない。いかにも古臭い家だ。

…体を起こすとそこには1人の男がいた。

「目が覚めたか」その男が振り向いた。それは鼻がでかく蜂に刺されたようにブツブツができていた。「どうだ気分は」  
「そうと男は僕に汁のような物が入った茶碗を目の前に置いた。」

火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？（後書き）

どうも加来間沖と申します。

まあそのまんま原作は火の鳥です。

勝手に名作を自分風に書いてみることにしました。そんなのが嫌いな人は見ないほうがいいです。

そういつのが、おこな方は見ていただけたら幸いです。

火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？（前書き）

突如光に包まれた少年。

彼が行き着いたのはある男の家だった。

## 火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？

「まあ飲め」その男は俺の前においた茶碗に指を刺していった。僕が一口のんだのを見て、

「おまえさん、あそこで何をしていた。そうだ名前は？」

「僕は山下です。…」そこで言葉が詰まった。まずここがそこから分からないしこの男が何物かすら知らない。それどころかさつき光のようなものに包まれて…。ウツ。

僕はそれから先を思い出そうとした瞬間強烈な吐き気に襲われた。

「おいおい大丈夫かい」男がよってきて背中をさすった。

少し楽になったからさつきへの問いの答えを述べた。「よく覚えていません」

男は少し驚いたような顔をした。まあ記憶が無いなんていったらそりゃあ驚くか。

「お前さんも政府の犠牲者か…」？何のことだ。政府が何だった？

「理解出来なくても無理は無い。今は寝てろ」といわれたので僕は茶碗に入ってた汁を飲み干すと再び眠りに入った。なぜかとても眠かった。

…。幾時間寝ただろう。部屋は暗い。さつきの部屋に電気は無かったから部屋を移されてなかったら、僕はさつきの部屋で寝ていた夜になっていた。

「あのー」僕はいかにも寝起きですという声を出してさっきの男の人を呼んだ。そいえば名前を聞いていなかった。

数分して俺は男の人に誘導されトイレに行き再び元の部屋に戻った。男の人は”托元猿彦”（たくもとさるひこ）というらしい。たぶん僕の知識では漢字で書けないだろう。

僕は仮眠をとって朝を迎えた。

家から出てみた。家の中とは違って随分新しそうな家だ。とりあえず自分の家の近くでないことは分かった。こんなところ来たことが無い。しかし周りに立っているのは別段変わったところの無い2階建ての家で遠くにビルが見えるし、猿彦さんも日本語をしゃべっているためすくなくとも外国ということではなさそうだ。

家に戻ると猿彦さんは朝食をくれた。ご飯と昨日の汁と豆腐だ。変わった朝食だなと思いつながら礼をいい食べた。

食べ終わると昨日の話しの続きが行われた。どうも分からない。「地図をみせてください」まずは場所から話すことにした。地図を見た。パット見て普通の地図だがどうもおかしい。地名が変なのだ。僕が住んでいたのは山口なのだがそこは長門と記されている。

不思議に思いながらも長門と記した場所に指をあてた。そして長門の詳細地図を見た。

やっぱり変な地名がある。だが知っている場所もある。幸い僕がいたところは同じだった。

この下関市です。

男は目を細くして「もっと細かい地図をとってこよう」というと本棚から取り出した。なぜそんなの地図があるのだろう。僕はあて

のならない地名交じりの地図で探して探しまくった。そして地形から大体の場所を割り出した。

「そこはこの付近だぞ」男はよかったなといわんばかりの頼もしい顔をした。僕は見覚えの無い風景を不思議に思ったが混乱していつて周りの建物のことを忘れてしまったのかなと思いきんだ。

しかし、あたりに僕の家は無かった。

## 火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？

「お前さん本当にここ住みなんだな」「はい山口県です」「あんまり大きい声で言うなよ。政府に聞かれたら厄介だからな」

猿彦さんがさしているのは山口県とかかれていた地図だ。猿彦さんの話によると10年ほど前地名も何もかも政府の革命で変わってしまったらしい。

さらに政府は社会保障制度に支出する金額の割合を35パーセントより13パーセント減少させた。そしてやってはいけない身分制度までもつけたのだ。低いことから 民 土付属民（土民） 土 貴族 貴士 王族の6つの身分に分類した。

一番低い民とは農業をしていたり年収が低い世帯を民として扱った。土というのは軍である。2年間かけて社会保障制度の10パーセントをまわしこみ陸軍を90万より120万に増強した。また海軍、空軍、独立海軍直属陸軍（愛称：海兵隊）総員150万名それぞれを土という。そしてその土が減少したときの補佐役としてある程度の年収がある一般市民を土民という。貴族とは大会社の企業の上の部分の人たちのことで、貴士とは土を直属におく権利を持つ富豪で、王族とは大臣などの100名ほどだ。

割合をいうなら民3割2部 土民6割 土4部 貴族3部 貴士・王族1部以下という感じだ。

医療制度などの基本的なものが受けれるのは土民以上である。普通身分制度というからして一番下の「民」が少ないというイメージがあるが、3割2部の人口も医療制度が受けられなければその分の金が浮く。

「民」は異常に貧しい生活をしているのだ。そう考えると3割2部とは多いと考えると不思議である。

何故このようになったかという地震で工業地帯が壊滅したためである。そのためリストラが進み「特別措置法」でこのようになったのだ。

猿彦さんはこのうちの土民にあたるようで最小限のものは受けれるそうだが、この政治に疑問を感じ敵対視さえしている。

ちなみに地名が変わったのは県などの利益がなんやらかんだで猿彦さんの説明じゃあよく分からなかった。

「そしてお前は恐らく政府の犠牲者だ。いやそうだ。そうだとしか考えられない」猿彦さんは話し始めた俺がこの世界にきた理由そして、リストラが進む一方で軍隊に社会保障制度の金をつぎ込まれ膨張している理由を。

火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？（後書き）

とりあえず序盤にあたるところが終了しました。  
お気に入りに入れてくれた方ありがとうございます。

火の鳥「少年編」？（前書き）

すみません短いです。

## 火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？

「この国は数年前まで戦争をしていたんだ」猿彦は話し出した。

「4年間続き軍がたくさん死んださ」

「勝ったんですか」気になったので聞いてみると、猿彦さんは力なく首を横に振った。「いや停戦状態なんだ。だからいつ戦争がはじめってもおかしくないって言って軍をいまだ増強してるんだ」

「そして過去から人間を送り込んできて洗脳し軍隊にする実験を行ったんだ」と遠くを見ながら、というより僕を見ないようにいった。

僕は何か気持ち悪い感覚にとらわれた。「つまり…僕がそうなんですか」「ああ…」猿彦さんが遠くを見ながら答えた。そして僕に視線を向けながら「やつら記憶を完全に消して転送し、命令を忠実にこなす軍を作っているらしい。お前もその1人になるはずだった」数歩近づいて「だがお前は記憶がある。何故だ？」そんなことを聞かれても分からない。

猿彦さんはしばらくしてまた別の地図を取り出した現在の基地だ。みると民、土民、それ以上の領域に分割されているのである。”正当なる壁”何が言いたいのか分からないが地図上にそう書かれている壁が3つの領域に分けているのである。

「これが今のこの国の制度だ。上の位のやつと下のやつは基本的に生活場所が遮断されている。」

僕はその日眠れなかった。と…言いたいような別にどうでもいいような…すぐに寝れた。

そして次の日猿彦さんと近所の人と話している。近所の人は何を話しているのかかすかに途切れ途切れで聞こえた。「もう我慢ならねえ…あの壁を…でもって…土なんかふき跳ばせ…」なにやら物騒だな。

猿彦さんは僕のところに来て「俺は明日より近所のやつらと共に士に対し反乱を起こす」…ん？「なんでですか」「殺されたんだ人が士のやつらが殺したんだ。30人も」「ささ…さんじゅうにん？ですか！」思わず大きな声を上げてしまった。

「ああもうこの声が政府に聞こえていようがかんけいねえ。士を叩きのめして、政治と戦うまでよ」

革命戦争が始めるのは明らかだったが僕には何も出来なかった。

火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？（後書き）

！  
土との戦闘を宣言し、腐った政治を叩きのめす革命が今起こる！

火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？（前書き）

試験ダルイお。国語の漢字組ごとに問題が違って1組なのに4組のやつかいてしまったお。30点喪失フラグ。

1組の問題を見る。…やべえ全部分かる。マジ最悪。問題用紙の作り方が不順。

もうちよと大きく”これは4組用の問題ですと書いてほしかった。

そして今日70点！！俺神！！

## 火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？

それから猿彦さんの家は慌しくなった。100人以上の人が集まった。

刹那。銃の発射音そして誰かのうめき声。

「政府だ叩きのめせ！」桑を持っていた反乱軍がその憲兵隊のような人物を叩き殺した。ボロ雑巾となった屍と思わしきものを玄関前から遠のけた。

僕はその瞬間急に目の前が暗くなったような感覚にとらわれた。

否、本当に暗くなったのだ。

俺の体は誰に操られていた。操られる？誰に？何故？答えは分からない。急に立ち上がり小走りで動き出した僕に猿彦さんは、「おい！どこにいくんだ」と声をかけるが僕は返事を返すことは出来なかった。否、話せない。

僕はどこに向かってんだ？

…幾分歩いたか。これが猿彦さんが言っていた土と土民の間の壁か…。なるほど立派だ。

門が開いた。見掛けによらず早くあいた。「過去人だなついてきな。といっても遠隔操作しているからだし丈夫だけだな」そういうと僕の体は自然にその門の中に滑り込まされるように入っていた。

僕の記憶はいったんそこで途絶えた。

「一方で猿彦さん達は「どこに行っただんだ山下!」「おーい山下」懸命に探していたがこれ以上憲兵みたいなのがきては困るため搜索を打ち切った。

「政府にやっぱり操られたんだ」「スパイをさせられていたのか!?!」

…こうなれば猿彦たちがとり行動はひとつだった。

「今からこの狂った世界を立て直す革命を起こすぞ!」「その声に皆は鳥の鳴き声を中断させるほどけたたましい声だった。

俺はなぞの部屋にいた。まあ分かりやすく言うと牢獄を豪華にしてみたみたいなの?

ラジオ、ベット、椅子、机があった。パニックになりかけた僕はとりあえずラジオを聞いてみた。

「現在長門地方で反乱が起こっています。現在土と交戦中」と慌しい速報が耳に入ってきた。

猿彦さんたちか。

「目が覚めたなら来てもらおうか」そこには銃を持った男が立っていた。金属音と鉄格子の扉が開いた。

火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？（後書き）

すいません。原本が消えてしまいました。アレに全部書いていたのに。

超スロー更新ですが、どうか温かい目で見てください。

火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？（前書き）

長らくお待たせしました。

## 火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？

「駄目だ、どんどん年を散っていく。DNAの老化を防ぐ野菜や若さを保つためのコラーゲンを摂取しても一時的にしかならないか。永遠の命がほしい。医の限界は何をやっても崩せないな・・・どれだけ俺が、他のやつらが身を粉に尽くしてもいつか人は死ぬんだ。男が部屋で鏡を見ながらおどおどと呟いている。

リリリリリ…電話のベルの音が慌しくそしてどこか悲しげに鳴り響いた。男はガラガラと電話の方向へ歩いていき受話器をとった。「なんだ君かね。ふんふん・・・そうか例の男がいま下のあの部屋にいるんだな。分かった5分くらい待ちたまえ。…何！！反乱がおきただと！そんなものは戦車で蹴散らし対ゲリラ用兵士で片っ端から殺せばよいだろ。…そうか、では他の地区からも援軍を要請せよ。指揮は君が取りたまえ。では」

受話器を不愉快そうに叩き置くと口を八の字に曲げて「どいつもこいつも」と薄っすら肌色が見える頭に何かをつけた。すると肌色が消えてハゲていない頭になった。

…いつまで待てばいいんだ。数分前銃を持った男から連れてこられた部屋で俺は六人の兵士と10人ほどの使いのものとされるものに囲まれて明るすぎず暗くも無い部屋の椅子に待機させられていた。いったいいつまで待てばいいんだ。俺は椅子に小さくなって座っていた。こんなところで堂々とした態度をとっていたら何をされるか分かったものではない。

そして扉が広がってそこから男が入ってきた。結構高貴な人なのだ

るう。まあこんな屋敷みたいなところにつれてくるのだから高貴でなかったらそれはそれで変だ。いや勝手に俺が自分の意思でなく体が勝手に動いたのが問題だ。

「まあそう小さくなる必要は無い。おい何か出してやれ」と男は俺の前にある机の前の椅子にドスリと座るとそういった。

「君に重要な話をしなくてはなるまい」と男が言ったのと俺の前にコーヒーが持ってこられたのは同時だった。

そのころ猿彦さん達は圧倒的な機械軍に圧倒されていた。ロボット機械兵までもがいる。かつて自分達にもロボットがいた日のことさえ思い出した。しかし政府にとられたのだった。

銃弾の音が交差し桑や棒切れで向かっていく者さえも見える。この戦はどこまでやっても恐らく成功する確立など塵のごとく小さなものだと理解できても、やらねばなら無くてはいけ無いのだ。

土と土民をさえぎる壁まで接近しつつあったとき民までもが共に革命をいざ起こさんと、出来るだけの武器を持ち数百人が駆けつけてくれた。

そのとき土は城門で死守命令を遵守していた。

「お前は過去から来たことを覚えているか？この世界の人間でなかったことを分かっているか」男のだ一声はそれあった。

「はい…大体分か…ります」

「まあ大体は理解できていようだな。ではこれからは私達も理解できないことがあるから聞きたい」

コーヒーをグイグイ飲むと男はやや甲高い声で「お前はどのように生き返ったのだ」

「はあ…」それは本当に理解できないことだった。



火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？（後書き）

いつのまに？まできたんだ？自分で書いててわかんない。ペース上げようと思った矢先のアイディア帳紛失は参ったね。

読んでくださった方ありがとうございます。

## 火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？

何を言っているんだこの男？少年は少し迷い率直に答えた。

「あの何のことでしょうか」男は何か珍しいものを見るような感じで「何をいつているのですか？それを聞いているのだが…」男はそれだけ言うと急に困った顔をして少し生えている顎鬚をなでた。

「火焰鳥を知っているかな」

「…火の鳥のことですか」俺は男の言葉に対してそう答えた。

「そうだ。その火の鳥と呼ばれている。あれがあれば永遠の命が得られる。僕はあの・・・」  
うっ！僕は頭に激痛が走った。火の鳥…ハツ…闇の中会った！！闇？どこだ。そういえばどうやってこの世界に…少年は急に上も下も分からなくなりそのまま崩れるように倒れた。

「おいどうした。しっかりしたまえ」男の声がする。僕が覚えていたのはそこまでだ。

一方の猿彦さん達は大木を振り回したり、岩を転がしたりする怪力の男を中心として対抗していた。「人の命も救わないで人を殺すこと事ばかり考えるおこがましい（＝馬鹿々）しい政治など必要が無い」

遂に城門をふさぐようにいた戦車が岩でつぶされると大木でその岩を城門内に転がしこんだ。「ひー逃げろ」「化けもんだああ」「オムカエデゴンス」

恐れをなして土は総崩れとなり城門内に逃げ込んだ。

その報告はすぐにこの男の耳に入った。

「何?!土は逃げた!!なんといい腰ぬけどもだ。俺が首になるのだぞ!なんとしても反乱軍を殺すんだ。特務軍を使え24時間は持つ。他の地区からの援護軍はまだか」

そして僕は。例の豪華バージョンの牢屋にいた。いやホテルの個室に鉄格子が付いているといったほうが分かりやすいかもしれない。

それはともかく記憶を僕は取り戻した。なぞの光に包まれて…そうだ僕は火の鳥とあったんだ。そして僕は復活した。しかしここで不可解な事がある。なぞの光はワープ転送の影響であると考えればいいが、何故死んだんだ?あの男が知っているということは俺はこちで一回死んだ?

何故?

俺はふつても振り切れない恐怖に駆られていた。

そのときだった。足音がした。医者のような。ちよと診断室まで来てもらおう。

俺はその部屋に連れて行かれて脳の輪切り画像などのチェックが行われたが何の問題も無かった。せいぜい人間の脳ってこんなものな程度しか思わなかった。

俺は数時間後、またあの男と会った。

「大丈夫かね」

「はい大丈夫です。今のところは」

そういうと男は眉の間にしわを寄せながら

「さっきはいきなりで分からなかっただろうから、いきさつから話

す

「君はこの世界に転送された。もし光に包まれたという記憶があるならそれがそうなのだ。しかし君は転送された瞬間に頭を強打して死んでしまった」

僕は飲んでいたコーヒを恐る恐る飲んでいたのだがいきなりだったので吹き出しそうになった。僕はそんなことで死んだのか。いんな意味でがっかりだ。

「しかし君は数分後生き返ったのだ。その時私達は不思議に思いながらもある器具を君の頭に入れさせてもらった」

よう分からん。

「そして君を外の地区に出しスパイとして働いてもらったのだ」  
そこまで聞くと僕は怒りがわいてきた。ムラムラとした闘志は僕を駆り立てるには十分だったががんばって抑えた。

「僕でなくてはいけなかったのですか」僕は幾分か高い声で質問した。

「言い方が不適切かもしれないが、君でなくても良かったのだ。いままでに何人も転送してきてるからね」

「いえ、そっちではなくその…」

「手術のことか…。政府にとつて不利な状況になったら我が館に来るように設定した器具を君の頭に装備したのだ。ちょうど器具ができたのが君が送られてきた時間だったのでね。今までのものは軍隊任務についている。向こうの時代の記憶は消えているはずだがね」

そこまで聞くとまた怒りがわいてきた。

その時ドアを慌しく開き何かしらの係り委員らしき男が入ってきた。男は僕との話を中断しその男と話し、顔を蒼くした。

「何！我が地区への援護が無い！」男は大声を出して驚愕の顔を

あらわにした。

「君との話は又後だ、部屋に戻してあげたまえ」と僕のほうを見て、部屋の土を見て部屋を出て行った。忙しい男だ。

猿彦さんたちはどうなってるのだろうか。それが気がかりだった。

## 火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？

なぞの轟音と共に僕の部屋がゆれた。地震ではない何かの爆発したような音だ。人々の声が聞こえる…次第に段々と…僕に喜びをもたらしているのかそうでないのか分からなかったが、僕に全くの無関係ということは無いのだろう。

一体何なんだ？何が起こってるそれが知りたかった。

そうだ！僕はラジオがあつたのを思い出すと部屋の中を見渡した。探し求めそれを踏み大いに痛がった後、適当に操作する。

「現在放送が出来ません。一時的に放送を中止しています…」は？

僕は意味が分からなかったので他のところを試してみたが変な曲が流れているかもしくわ放送がどうたらこうたらという話しかなかった。

「はぁー」何をする気も起こらないような気分では僕はベットに倒れこんだ。何でこんなことに。俺のいた世界はどうなったんだ。何も無いような口調で言っていたが…まずは自分の心配デモしたほうがいいのかな？脳にへんなことをされてるんだ十分問題だ。

変な曲を流しているラジオが途端に途絶えた。(ああ、ここもだめになつたか)そんなことを考えて、僕は電源を切るうとしたときだった。

「ザザ(雑音)…俺達は長門革命士民！長門革命士民！我は革命を起こす士民なり。腐敗しきつた政治を続けるものを倒すのみ。そのほかのものに被害は加えない。抵抗せず城門からでよ！！それで無い場合は命の保障では出来ない。我々は無駄な命を失わせたくない」  
この声は…間違いない猿彦さんのだ！

突如！！再び轟音と共に僕の部屋がゆれた。床に落ちた僕はそのまま耳を床に接着させ音を聞いた。銃声…叫び声…爆音…ありとあらゆる音が聞こえる。

「オムカエデゴンス」ん？うるさい奴だ。横を見ると変な生物がいる。このスパ○ダーというキャラクターは「○○でゴンス」という口調が定着している奴だ。まっことうるさい。

「オムカエデゴンス、オムカエデゴンス」ジャンプしながら訳の分からんことを言うス○イダーに  
「煩わしい！！」と怒鳴りたたき出した。

ムッ僕はまた目の前が暗くなった。俺はどこに向かうのか分からない。もうどうにでもなれよ…。

その夜特務軍という新鋭軍の活躍で城門に侵入していた土民は多大な損害を被った。多くが捕まった。

もっも僕はそんなことを知らないのだが。

火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？（後書き）

次回の次回ら辺完結？

## 火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？

特務軍の参加により総崩れとなった革命士民の主力軍を狙い撃ちにするかのごとく体制を取り戻した長門の士が城門より狙い打つ。次々倒れまたは拘束されていく。

僕が自分の意思で動けなくなっている間自分の体は気持ち悪いことに何かに触っているという感覚はあるのだが、腕や足が自分の意思で動かせないのだ。どうしようもない。そして幾分歩いただろうか。僕は自分の部屋に戻ってきていた。

金属音がして鉄格子のドアが開く

そこで動けるようになった。

次の丸一日は食事を出されて終わりだ。

その夜はやけにうるさかった。何千という人間が馬鹿騒ぎすればこれほどになるのだろうかという騒音それしか聞こえなかった。

僕はそれが何を意味するか分かっていった。布団を頭から被りラジオをつける勇氣も持てず寝た。

そしてその日の午後また例の症状が起きた。半分放心状態の僕はただ自分の体が動いている感覚に気持ち悪さを感じながら歩いていった。

僕はある部屋にたどり着いた。否外だった。えらく殺伐とした場所にそれはあった。いやな予感がして引き返したかったが自分の意志で動かないのだ。それを見るしかなかった。

そこには猿彦さんが…。無残にも丸太に縛られていた。他にも同じ革命に加わった士民や民と思わしき人が縛られている。

「猿彦さん……」何とか声が出せた。

「おお山下か。このごまだ」猿彦さんは苦笑した。

「　　っ」何か言おうとしたが何もいえない。これから行われることがわかった。この外の風景のむこうにコンクリートで作られた建物がありガラスから何人かが僕達を見ていた。表情は見えないがあざ笑つかのように見ているような感じがする。

「今より実験体201の射撃実験を行います。目標は革命士民主謀者の中の3名です」スピーカーからそんな声が聞こえる。実験体201誰だ？僕の体は勝手に動き後ろのテーブルの上におかれていた拳銃がおかれていた。

「やめろおお」僕は全てを理解し叫んだ。しかし相変わらず体はそのまま動く。そして口も動かなくされた。自由に管理されるらしい。

向きかえり。一步、二歩、　　足が勝手に動き出す。

そして僕の腕は真っ直ぐ前に突き出された。その手には拳銃が。

やめろおお！俺は頭の中でそう叫んだが…。

銃声が3回轟く。振動が腕に3回伝わった。その弾は確実に猿彦さんと他の2人の心臓を貫いた。僕はとたんに体が自由になった。僕はそのまま崩れるように座り込んだ。

許さない。殺してやる、殺してやる、殺してやる、あの男を殺してやる。

その男と思われる男は例のコンクリートの部屋にいる。

絶対あの男を殺してやる。僕は殺意を抱きながら再び目の前が暗くなるのを感じながら部屋に戻った。

猿彦さんは政治と闘い死んでいった。

「ムッ」闇の中で猿彦の声が聞こえた。もっも猿彦は自分が誰だかわかっていないようだ……。

そのとき向こうの暗闇から光るものが飛んできた。ゆるやかにそして猿彦の前まで飛んできたのだった。

猿彦はその鳥に何かしらの見覚えがあった。ずっと前からその鳥のことを知っているかのように。

猿彦は急に鼻になにかしらの異変が起きているのを感じた。すると鼻のブツブツがない。無くなっている。

「罪の洗礼は終わりつつあります」その鳥がいった。

「罪の先例？」いかにも不思議なものを見るような目でその鳥を見た。

「フフわからなくて当然ね。これを見たらわかりますね」すると猿彦さんは不思議な光景を見た。

どこかわからないところで自分とよく似た鼻の男が赤ん坊を投げ捨てた。ハッ！何をしてるんだ？

「これはあなたの先祖です。あなたはこの事で罪をうけます。自分1人である女を得ようとした為

このようなことをやったのです」猿彦にはよくわからなかったが、おりあえず先祖が残した罪のせいで、自分の鼻がこのようになったのだと理解した。

「今まであなたと同じような鼻をしてきた人間が幾多のこのことを行い死んでいきました。そして

あなたの番となりようやく罪の洗礼が終わりつつあるのです」「俺は次はどうなるのだ」「少々話がわかってきたため尋ねると、「これからあなたは結構先の時代にいきます」「火の鳥は淡々と答えた。

猿彦は急に意識を失った…。

火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？（後書き）

気づいているひとはいますか？火の鳥鳳凰編で我王が夢の中で見た死に方ですね。政治と戦って死んだという例の死に方です。

火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？（前書き）

冬休みも宿題がなければ何十倍楽しいことやら。

## 火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？

あの男を殺してやるという考えは変わらない。自分の体を操られロボットのようにされ、拳句の果てには猿彦さんを殺してしまった。まるで玩具のように自分が操られているのにも腹が立つ。

だからあの男だけでも殺してやる。

殺意、執念、仇討ち様々な気持ちが少年の心に芽生えそれが今、増幅の一途を辿っている。冷めることのないこの気持ちをぶつけた  
い！

次のチャンスを待つんだ。次のチャンスを……。

腹が空いた頃飯が届けられた。それを食うなり食器を一つ、わざと床に落としてわざと割った。

回収の人に謝り陶器製の破片をポケットの中に入れて別途に潜り込み寝た。

そして夢の中で少年は懐かしい夢を見た。

それは少年がかつていた世界である。友人がいる。家族がいる。親戚もみんないる。そんな夢だ。皆楽しそうである。その中に自分もいた。戻りたい……。

ガチャン

金属音で少年が目を覚ました。気がつくどドアが開いていた。否、

開けられた。何回か見ている係りの人だ。

「これでおそらく最後の面会になるだろう。さあ来い」そう言った男に俺は付いていった。

「ここだ」係員はドアをノックして電話(?) みたいなのでゴチャゴチャ言々とドアが開いた。

「さあ入れ」係の人は僕を押すなりドアを閉めた。

妙に小汚い部屋だ。アンティークのようなヨーロッパ系のレンガ造りで暖炉がある。その床の石の並べ方がガサツで汚い。

男はテーブルの前に座っていた。殺すなら今だ。俺は全筋肉に力といってもそんなにないのだがを入れて殺しにかかるうとしていた。その時、

「来たまえ君の脳にいれたものを壊してあげよう」と言ってきた。壊すとは変に乱暴だが、それはともかく・・・取ってもらえるならさっさと取ってもらおう。

コツツ、コツツと非常にいい音が歩くたびに聞こえる。しかしあまり聞こえがいいものには聞こえなかった。

「よし今すぐ壊そう」と言って男は僕にあるものを向けた。拳銃だ。何もするまもなくその拳銃は銃口から火を吹き僕の右脳を掠め通った。

「君には要済みだ。感情が残っている」  
そして機械か何かの音が聞こえる。おそらく壊された例のものだろう。

床に崩れるように倒れて激痛に悩まされた。それであってだんだん気が遠くなっていくような気分だ。俺はこの男を殺せずに利用されるなりさっさと殺されるのか。

ああ、痛みが消えてきた。目の前に何か見える。鳥かな。

嗚呼、火の鳥ではないか。俺は同時に走馬灯のようなものが流れてくるのを感じていた。

「哀れ。でも悲しんだり自分を憎んだりすることないのよ。私が生き返らせるわ。さあこの血を飲んで」火の鳥は俺のポケットに入っていた陶器製の破片で自らを切り血を垂らした。僕はなんのことかわからないが生命的な欲求かもしれない。その血を手につけ飲んだ。

意識がはつと戻った。

男がいた。すぐ近くに。

「その死体を処理したまえ」偉そうに部下に言っている。おまえが死体になるんだ！

僕はスクリと起き上がった。かと思つた瞬間自分でも信じられない速度で男に向かつていった。破片を持って驚きで目を見開いている喉に刺して横にやる。うめき声にもならないような声で男は転倒した。僕はその男より拳銃を奪い男の脳天をぶち抜いた。反動で腕が上にかかる。

その手を狙つたかのようにオレンジ色の線を引いた弾丸が飛翔する。

部下だ。そして僕の体に命中する。痛かったが。傷口がすぐにふさがった。部下たちは大慌てで拳銃や自動小銃をぶっぱなす。自分

は死なない。僕は不死の力を得たんだ。

部下たちが弾を撃ち尽くしたのを見ると  
「過去に戻せ」と言い拳銃を突きつけた。

そして僕は戻ることができた。現世に。

そんな自分が今どこにいるかはまた次に話そう。

火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？（後書き）

10日間も放置してました。

次回からは新シリーズにはいります。

なんか最後やっつけですいません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0230y/>

---

火の鳥 少年編

2012年1月9日21時49分発行